

矢沢／トップダウン方式について質問がいくつか来ています。その中で、手話を使うのがいいという場合、手話は、ろう者が使う日本手話なのか、日本語対応手話なのか。また、手話と日本語では文法が違うのですが、人工内耳を使ったあと聴覚型に移行するとき、それがスムーズにできるのか、そのあたりをお願いします。

田中／明晴学園の子どもが[わたしのクリニックに]きてくれています、日本手話の子どもと勉強する機会があるのですが、言語の深層構造は、日本手話も日本語も英語も同じだと思います。チョムスキーなどは、「言語は人類共通の普遍的な能力」と言います——そこまで言うと言い過ぎだと思いますが。

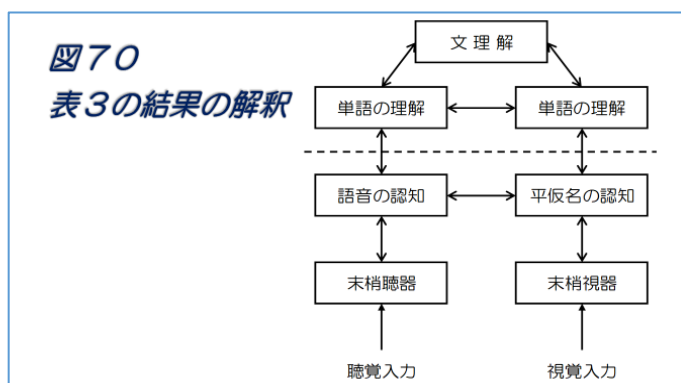
ろう家族の家庭で育つろう児は、読む力は一般的に高いです。それは日本手話も言語である、ということを見ると、概念形成ということでは共通していますから、そういうことが生きていると思います。

ただ、音声言語と日本手話は構造が違いますから、音声言語を教えるときには、やっぱりそれに配慮が必要だと思います。読み書きレベルでやっているのとは違いますが、私は（手話は）専門ではないのでわかりませんが、患者さんと会っていて、ろう家族の言語力は高いと思います。

矢沢／トップダウン方式について、スライド18（図70）についてあらためて、お聞きします。

この図は、左側が聴覚入力、右が視覚入力です。

小さい時に手話を使って親子で安定したコミュニケーションをした場合、右側の「視覚入力」で、手話であるけれども、それによって言語（単語、文）が形成される。人工内耳をつけたあと、手話によって形成された言語（ランゲージ）を手がかりにして、聴覚入力のことばが聞き取れるようになる、と理解しました。すると、ランゲージの形成は、入力面においては、みぶり・手話であっても、またその音声に伴う日本語対応手話[口話併用手話]の、どちらでもいいということになるのでしょうか。



田中／私は初期段階はどちらでもいいと思います。

ただ2歳過ぎて本格的に言語が発達した場合、日本語を読もうとしても構造がありますから、それを意識した指導が大切だと思います。その前の言語獲得の過程は難しく考える必要はないと思います。口話に持っていくときに、幸いに、日本語（かな文字）は都合がいいことに、表音文字ですから、指文字を使うと、それを真似て発音すると口話訓練はやりやすい。

矢沢／もう1つ質問があります。手話が思春期以降、特にインテグレーションした子どもが、精神的に悩んだりすることがある。その場合、手話を使うということが、一つの大きな支えになる。このことについての質問があります。

田中先生のお話では、手話を使うことの意味は、2つある。

## 22.01.29 第8回オンライン研究会（当日の質疑応答の記録）

1つは、人工内耳を装用する以前の乳幼児段階で、身振りや手話を使うことによって、親子のコミュニケーションがしっかりできること、その中でランゲージが形成されること。

もう1つは、人工内耳を装用したあとの、学童期あるいは思春期、そこにおける自分の障害の受容、そういう面で手話は役に立つ。

思春期以降の子どもについて、手話が支えになったということで、先生がご存知の事例があれば教えてほしい。

**田中**／私は人工内耳というより、子どもたちをフォローしています。

人工内耳を使っていた子どもが大きくなって人工内耳を使わず手話に移行することもあります。そのばあいでも、普段、親御さんが、手話を使っていると、体系的にわかっていますから、必要だと思ったら子どもとの会話で自然に手話が出てくるんですね。

また、親御さん自身が手話通訳者として、社会貢献している事例があります。これは手話をいれたことの大きな意味だと思います。余計なことかもしれませんが。

子どもたちに私も昔は手話は入れていなかったのですが、子どもたちは、どこかで一大学とかで一手話を覚えてくるのですが、年齢が関係してくる。

小さいときから手話を使っている子と比べると、[手話が]追いつかない、小さいうちから使っておけばよかった、と言ってくる子どももいます。

今でもあるかもしれませんが、ろう学校の卒業生が—ろう学校は手話を使っていることが多いですが—卒業して、ろう者同士が会ったときに、手話を使っていないろう学校の卒業生と会ったら聴覚障害者同士がコミュニケーションできない。

これはそう考えると、手話はもっと聾学校でも考えてほしいと思うんです。

これから、共生社会を考えると、親御さんが手話に親しむのはどこかで役立つはずです。

それをまず期待したいです。同時に学校生活は、聴覚障害児を含めて、共通のコミュニケーション手段というものを保障していく、その配慮もあって然るべきだと思います。

**矢沢**／ろう学校の話が出ましたが、人工内耳をしたあとの療育・教育をどうするかということが問題になっています。ある人に言わせれば、ろう学校は手話を使うから、人工内耳の療育には適さない、という人もいます。つまり聴覚口話1本でやっていくような場所じゃないとだめだと。田中先生はろう学校のように手話を使うところが必要だと言っていますが、しかし、ろう学校で人工内耳を装用した子どもに対する療育・教育をやる場合に、どういうことが必要なのか、ろう学校にどういうことをしてほしいと思うか、田中先生はどうお考えでしょうか？

**田中**／私は、人工内耳に限りませんが、日本語力を高めるということが大前提だと思います。

そのときに、やっぱり手話は活用できるし、否定する必要はまったくないと思います。

明晴学園の子どもたちを見ていると、日本手話は100%視覚言語ですから補聴器も使わない。

日本語対応手話というのは、日本語に合わせて作られた手話ですから、聴覚活用に日本語対応手話は良いと思います。指文字もそうです。

ろう学校でいちばん大切なのは言語力・日本語力の教育です。

手段として人工内耳だけではなく、手話もどんどん使うべきだと。

[手話を使うと]人工内耳がだめになるということは考えにくいです。

**矢沢**／以前は、ろう学校でも手話を使わないところもあって、田中先生はろう学校なのになぜ手話を使ってくれないのか、ということがありました。現在、ろう学校ではほとんど手話を使っていますが、人工内耳を装用して、聴覚口話による日本語の獲得・発達ということを考えた場

## 22.01.29 第8回オンライン研究会（当日の質疑応答の記録）

合に、ろう学校において、聴覚口話の指導や訓練、そういうものも必要になると言われると思いますが、ろう学校としてはどうすればいいのか。

参加者からの質問のなかに、ST（言語聴覚士）にとって、どういう人工内耳装用児に対する訓練・指導が必要になるか、という質問がありました。あわせてお願いします。

田中／大前提はランゲージだと思います。それをベースにして聴覚口話にもっていく。それから、人工内耳をやる本人、親御さんは口話を期待している、それに答える、けれどもランゲージが発達していないとスピーチもだめです。実際問題として、いろんなところに就職できるようになっていますが、今日のようなオンライン教育会とか、文章がうまくまとめられないと、職場で困っていることは結構できています。

読み書きがすごく大事ですね。

日本語を口話にもっていくことは、人工内耳では難しくないことだと思います。

ただ、日本手話のばあいは、それを日本語に持って行くには、どうすればよいか。これから研究していかなければならない。わたしもまだ答えられない。

矢沢／もう1つ別の質問です。補聴器と人工内耳、どちらも効果があると判断された乳幼児が、人工内耳をすすめられている、という話がありました。

人工内耳ではリスクがあるため、補聴器がよいというのが一般的な見方だと思いますが、そのあたりはどう思いますか。人工内耳の手術をするかどうか、決断の問題ですね、そこらへんにおいて、配慮すべき、こういうところに留意すべきというところがあれば。

田中／私は長い経過を見ていまして、難聴児が社会にでて活躍することは、手話か口話かを超越した問題だと思います。子どもがハッピーであるかです。そういうことを考えて、子どもが大人

になったときにハッピーになるためには、何を重要視すべきか。やっぱりランゲージです。私は言語形成と人間形成、それにつきますと思います。人工内耳は補聴器も使って言語も獲得していく、これは成長してから人工内耳をしても、人工内耳は役立つはずなんです。

大人になってやった例はそれなりに役に立っていますし。

聴覚障害児の教育も、目標はランゲージが大切。

コミュニケーションは人間関係の問題ですから、人間形成、その2つだろうと思いますね。聴覚は極力使ったほうがよい。

### 子どもの人工内耳 (CI) についての疑問

4. CIの経過や効果に個人差がある。  
その背景にある問題は？
5. 手話はCIの効果を妨げるか？
6. 聴覚口話 vs. 手話 の対立を止揚する方法はあるか？

表2 難聴幼児が選択したコミュニケーション・モードと難聴程度との関係

dB	70~79	80~89	90~99	100~109	110以上	計
聴覚口話>手話	1	4	4	1		10
聴覚口話=手話			1	1		2
聴覚口話<手話				1	4	5
計	1	4	5	3	4	17

### 子どもの人工内耳 (CI) についての疑問

1. CIにより難聴は治るか？
2. CIに何を期待するか？
  - 1) 生活言語 (speech) か？
  - 2) 言語力 (language) か？
3. CIに年齢的制約はあるか？
  - 1) 乳児期に装着させることの意義は？
  - 2) 成人については？

## 残っていた質問に、後日、応答いただきました。

**質問 1** / 人工内耳を装着している乳幼児を担当しています。手話も使っては会話を楽しんでいます。常に「あー」と声を出すので、周りの人が困っている様子があり親も困ってます。まだ気持ちを伝えられない乳幼児なので原因が分かりません。何か考えられる理由があるでしょうか。

**田中** / 人工内耳をつけていて常に「あー」と声を出しているのは、人工内耳を通して自分の声が聞こえている証拠です。人工内耳をはずしていると、声を出さなくなるのではないのでしょうか。常に声を出していること自体は、自発的発声訓練をしているわけですから、悪く解する必要はありません。周りの人が困っているほど声が大きいとすれば、人工内耳のマッピングで解決できるかもしれません。

**質問 2** / 神経管狭窄の子が人工内耳を装着した際の効果や、その後の経過などの事例がありましたら、教えていただけますでしょうか。また、神経管狭窄の子が人工内耳をした際に、発音がよくなる効果は望めるのでしょうか？

**田中** / 神経管狭窄症については、我々は適応にしていなかったですが、保護者の強い希望で1名だけ人工内耳を装着させた例があります。やはり効果はありませんでした。

**質問 3** / ホームトレーニングの概要や具体的な内容、方法について教えていただきたいです。又、現在も実践されていらっしゃいますか？

**田中** / ホームトレーニングには、かなり専門的知識と経験が必要です。今、簡単な解説を書いています。

ろう難研事務局より（ [田中美郷教育研究所 \(noside.org\)](http://noside.org) をご覧ください。）

田中先生、ありがとうございました。